

《論文》

金允植（号：雲養）と日本人官僚・文人学者の 詩文唱和について

——『雲養集』所収『東槎謾吟』と『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』を中心に

魯 耀 翰*

Exchanging Poems between Kim Yun-sik and Japanese Scholar-officials:

Focused on *Tongsa manum* Included in *Unyangjip* and *Shibasankan noryo showashu* · *Keimyo showashu*

NOH Johann

Kim Yun-sik (金允植, 1835-1922) visited Japan with Ito Hirobumi (伊藤博文, 1841-1909) as an ambassador to prince Yeongchin (Lee Eun 李垠, 1897-1970) in 1908. On July 29th, he attended a banquet held at Suematsu Kencho's (末松謙澄, 1855-1920) Shiba Shiroyama Hall (芝城山館) to exchange poems with eminent Japanese figures. In the middle of August, he exchanged poems with Suematsu Kencho and Mori Kainan (森槐南, 1863-1911) while travelling in the Nikko (日光) and Myogi mountain (妙義山) areas. These poems were compiled as *Shibasankan noryo showashu* (『芝城山館納涼唱和集』) and *Keimyo showashu* (『輕妙唱和集』) and published in one volume by Shueisha (秀英舎). Kim Yun-sik also compiled a collection of poems of that time and named it *Tongsa manum* (『東槎謾吟』). Among his poems exchanged with the Japanese figures, there are many poems that have a strong tendency so-called “pro-Japan” that the evaluation of him is on the whole negative. This paper also argues that his poems should be re-evaluated as a sort of diplomatic poetry composed in a place of diplomacy.

キーワード：金允植、伊藤博文、末松謙澄、森槐南、『芝城山館納涼唱和集』、『輕妙唱和集』、『輕妙唱和集』、『東槎謾吟』、『雲養集』、外交詩

* 高麗大学漢字漢文研究所研究教授
yhnoh1214@korea.ac.kr

Received on 2019/11/22, accepted after peer reviews on 2020/6/5.

Keywords: Kim Yun-sik, Ito Hirobumi, Suematsu Kencho, Mori Kainan, *Tongsa manum*, *Unyangjip*, *Shibasankan noryo showashu*, *Keimyo showashu*, diplomatic poetry

1. はじめに

金允植（1835-1922）は、旧韓末の穏健開化派として、激変する情勢の中心にいた人物である。金允植は、字を洵卿、号を雲養といい、清風が本貫である。兪莘煥と朴珪壽の門下で修学し、30歳で進士試に合格、40歳で文科に及第した。以後、多くの官職を経たのち、47歳に当たる1881（高宗18）年に領選使に選ばれ、天津へ行って李鴻章と米朝修好通商条約問題について論議した。翌年の1882年6月に壬午軍乱（壬午事変）が起こると、署理にして北洋大臣の張樹聲と会談して清軍の派兵を要請し大院君排斥法案を提議、7月に帰国する。1884（高宗21）年の甲申政変以後の兵曹判書就任を経て、同年7月には督辦交渉通商事務・外務衙門大臣となった。

1886（高宗23）年、金允植は52歳で廣州留守となるも、1887（高宗24）年5月に明成皇后（閔妃）の親露政策に反対して閔泳翊とともに大院君の執権を謀議、明成皇后の恨みを買って沔川郡に7年間流配されたのち、1893（高宗30）年2月に赦免された。61歳に当たる1895年（乙未）の政局改編で外部大臣に任命され、明成皇后が殺害された後に金弘集内閣が始動、そこで推挙されて外務大臣となる。しかし、1896年12月に俄館播遷（露館播遷）で金弘集が死去して親露派内閣が発足すると、乙未事変（明成皇后殺害事件）と関連して廢后偽詔を各公館に通知したという罪で弾劾され、済州島に終身配流されることとなった。1901（光武5）年に智島へ移配され、1907（隆熙1）年6月に赦免されている。

1908年に74歳で中樞院議長に任命されて勅書を受け取り、皇太子の李垠（1897-1970）への問候（謁見および目上への挨拶）のために東京へ行き、その功勞で勲一等太極章を授与される。翌年、再び東京に赴いたのち、大匡輔國崇祿大夫（正一品）に昇進した。1910年8月22日に御前會議の席上で純宗の合邦（日韓併合）についての下問に「不可不可」¹と答え、10月に子爵の爵位を授かった。1919年1月の高宗昇遐後に入宮して国葬の準備に尽力。3月に独立承認を要求する「對日本長書」を総督府と日本政府に伝達すると家族まで拘束され、爵位を剥奪される。3年後の1922年1月20日に88歳で生涯を終えた（李, n.d.; 金, 2009: 43-82頁; 延, 2019: 11-14頁）。

以上、金允植の生涯は、30歳以前までの修学期・30歳から53歳までの仕官期・54歳から73歳に至る19年間の流配期・74歳から88歳で生涯を閉じるまでの解配（流刑を解かれ赦免されること）以後の活動期、に分けることができる。ところで金允植は、その初期には朴珪壽（1807-1877）と兪莘煥（1801-1859）を通じて北学の学脈を受け継ぎ、清と通じた富国強兵を謀ったが、後期には西洋に臨んで東洋を保存する者はただ日本のみと考えるに至った（許・斗, 2011: 253頁）。

金允植は、清と日本の人士と幅広い交友関係を持っていた。清の人士としては、北洋大臣の李鴻章と袁世凱、廣東水師提督の吳長慶、統領水師提督の丁汝昌らを代表的な人物として挙げるができる。同じく、日本の人士では、第3代朝鮮総督を務めた寺内正毅、朝鮮公使を務めた竹添進一

¹ 「不可不可」については「不可、不可」と「不可不、可」という二つの読み方が存在し、金允植の優柔不断な性格を象徴的に示す言葉と評価されている。

郎、統監府内部次官を務めた木内重四郎、『京城日報』と『毎日申報』の社長を歴任した阿部充家、日本の公使として韓国に赴任した井上馨、第2代朝鮮総督を務めた長谷川好道、漢詩人にして中国研究者であった今關天彭、漢学者の三島毅（号は中洲）と森大來（号は槐南）など、政界および文化界の人士たちと交流して詩をやり取りした。

『東槎謾吟』は、金允植が1907年に長い流配から赦免されて帰ってきたその翌年の4月に中樞院議長となり、同年8月に勅書を授かって英親王を問候するため東京に赴いた期間に詠じた詩を集めたものである。英親王は、1900年8月に英王に封じられ、1907年に皇太子へと冊封されたけれども、その年の12月に遊学の名目で東京に滞在することとなった。このとき、当時の朝鮮総督であった伊藤博文が師傅となり、その娘婿で当時の実力者であった末松謙澄（号は青萍）が教導となって英親王の教育を担当した²。

金允植は、1908年7月15日に仁川を発ち、7月23日に東京へ到着、皇太子への問候の使節として任務を終え、9月2日に東京から漢城（ソウル）へ戻った。帰国後は、日本訪問の道中で記した詩と日本の多くの人士らと唱和した詩を集めて『東槎謾吟』を編んだ。この『東槎謾吟』は、『雲養集』巻6に収録されて伝わっている。

金允植は、日本に滞在している間に、7月29日には末松謙澄の芝城山館で開かれた宴会に参席して日本国内の各界の人士と詩文の唱和を行い、8月中旬には末松謙澄・森大來らと日光や妙義山の一带を遊覧して詩文を唱和したが、これらの詩は日本で『芝城山館納涼唱和集』と『輕妙唱和集』としてそれぞれ編纂され、その年の10月15日に『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』合本という形で日本の秀英舎から出版された。

以下、本稿では『東槎謾吟』と『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』の編纂および構成を検証し、更に金允植の詩文唱和の持つ意味について簡単に検討してみたい。

II. 金允植の駐日旅程と『東槎謾吟』

『東槎謾吟』は1908年8月に勅書を受け取り、皇太子の李垠に問候するため東京に赴く間に作成した詩と日本で唱和した詩を編纂したものである。『東槎謾吟』は金允植の文集『雲養集』巻6に収録された³。金允植は、『東槎謾吟』の序の冒頭で次のように些か短い序文を残している。

戊申夏（1908），奉命往日本東京，承候東宮，與伊藤春畝，同舟而行，往返五十餘日⁴。

伊藤春畝はすなわち伊藤博文である。金允植は1908年7月8日に東宮問候官として選ばれ、伊藤博文の帰国に同行する形で日本を訪問した。このとき、随行員として鄭丙朝、純宗の御使として嚴柱益と徐丙協が同行した。

金允植は、7月15日に伊藤博文とともに艦船吾妻に乗って仁川から出発、済州を經由して7月17日に下関へ到着する。7月18日に貴賓車で東京へ向かって出発し、宮島（7月18日、1泊）、舞子

² 金允植「與末松青萍（謙澄）書」、『雲養集』巻12、「書牘」下。

³ 金允植は、1913年に師の文集『礫齋集』と『鳳棲集』を、翌年には自身の文集である『雲養集』を刊行した。1915年4月に帝国学士院の会員となり、同年7月にはこの『雲養集』で帝国学士院賞を受賞した。

⁴ 金允植「東槎謾吟序」、『雲養集』巻6、詩『東槎謾吟』。

(7月19日、1泊)、神戸・大阪・京都を経て、岐阜(7月20日、1泊)の後、7月21日に大磯(神奈川県)に着いた。大磯で英親王が遣わした御使と対面し、7月22日に金武官を英親王に遣わして日本到着を奏上した。

金允植は7月23日に東京に到着して英親王に拝謁し、7月24日には英親王が主催する午餐に伊藤博文・末松謙澄と同席する。7月27日には英親王が純宗皇帝に代わって日本の皇后に一等勲章の瑞鳳章を贈呈する場に陪席し、同日、天皇に謁見した。7月29日には芝城山館で開かれた宴会に参席する。このときに唱和した詩は『芝城山館納涼唱和集』として編纂され、序文は金允植によって作成された。7月31日には英親王が伊藤博文公爵夫人に叙勲する場に陪席した。8月3日は英親王が伊藤博文と末松謙澄の案内で横浜の軍港を観覧するのに随行。一行は駆逐艦に乗って金沢にある伊藤博文の別荘へ向かったが、このとき、英親王・伊藤博文・金允植の三人と、更に末松謙澄・鄭丙朝・嚴柱益らが同行していた。

8月16日から22日までの間は、末松謙澄・江木衷(号は冷灰)・森大來・永阪周(号は石埭)らとともに日光・軽井沢・布引山・浅間山・妙義山を遊覧して戻ってきている。この時に唱和した詩を『輕妙唱和集』として編纂した。

8月27日、金允植は、8月10日に見学と避暑を兼ねて西日本を遊覧して戻った英親王を新橋駅で迎接する。8月30日の晩、伊藤博文が三河楼で開いた送別の集いに参席して詩文を唱和した。この宴会には、鄭丙朝・鶴原定吉朝鮮総督府総務長官・森大來・永坂周らが参席していた。9月1日、鳳凰閣で行われた英親王の天皇謁見と別殿での午餐に陪席し、同日、勲一等旭日章を叙勲された。そして9月2日に金允植一行は新橋駅から列車で帰国の途に就いたのである⁵。

金允植の東京到着後、7月29日に宴会が開かれた芝城山館は伊藤博文の娘婿に当たる末松謙澄の邸宅であり、ここは、以後の約10年余りの日朝交流において相当重要な空間となった。朝鮮人が日本を訪問するとき、出会いの中心には末松謙澄がおり、主に彼の私邸である芝城山館を中心として宴会や集まりが行われていたためである。1909年4月、朝鮮人観光団が日本へ来た際、閔泳韶・金宗漢・李重夏・鄭萬朝・宋榮大・尹喜求・鄭鳳時・辛成默・李承旭・朴彝陽など数十名が芝城山館に招待され、このときに唱和した詩は『善隣唱和』(秀英舎、1909年6月)として出版された(朴、2012:89頁)。芝城山館は、当時、東京の芝区西久保城山町にあり、本来、館名は無かったけれども、金允植の訪問で開かれた宴会で森槐南が芝城山館と命名し、その名が決まった⁶。芝城山館と軽井沢および妙義山一帯で開かれた二度の宴会で唱和した詩は金允植一行が発ってからさほど時を経ていない10月15日に『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』(秀英舎)の合本として出版され、金允植に300部が郵送されている。

金允植一行の日本旅程と『東槎謾吟』に収録された詩文を時系列に沿って整理すれば次のとおり。

日付	日程	『東槎謾吟』収録詩文
7月15日	仁川(艦船吾妻)	
7月17日	下関(宿泊:春帆楼)	「春帆樓懷古呈伊藤公爵」「夜宿春帆樓」
7月18日	宮島(宿泊地不明)	「宮島紀勝」

⁵ 以上、金允植の旅程は金允植(2004:「東槎謾吟」、末松(1908)、小松(1927:第1巻)、金聖培(2009:77-79頁)を参照。

⁶ 末松謙澄「納涼唱和集緒言」。

7月19日	舞子（宿泊：萬龜楼）	「宿舞子」
7月20日	京都	「過西京」
7月20日	琵琶湖	「琵琶湖」
7月20日	岐阜（宿泊：萬松館）	「長良川觀鷺飼捕魚」
7月21～22日	大磯（宿泊：滄浪閣）	「滄浪閣絕句三首呈春畝」
7月23日～	東京	「祇謁東宮退賦一律」「陞見豐明殿」 「謁青山宮次韻和三島侍講」
7月29日	芝城山館	「城山席上次春畝韻」 「賦贈青萍貴爵兼乞列位詞伯評正」
	青山宮	「青山宮謁日本皇太子索詩承命呈一律」
7月29日	芝城山館	「女史馬杉青琴求詩婦人繪畫會中有名畫手也」「題望月金鳳畫虎」「題荒木寬畝梅竹蘆鴈圖」「題山岡米華林間茅屋圖」「題望月金鳳畫猿」「題熊谷老人畫富士山入雲圖」「題岐南尚志畫」「題佐竹老人永湖瀑布圖」「題奧原晴翠女史雨景圖」「次韻題晴翠女史山水障，題跡見玉枝女史畫」「題武村耕藹女史寧樂鶯瀑布圖」「次韻題渡邊華石林間兩蛙圖」「題小室翠雲雨後看山圖」「題高島北海漁叟蜀道金牛峽圖」「次韻題杉溪六橋雨後景圖」「題荒木十畝梅竹蘆鴈圖」「題川端玉章山林瀑布圖」「題荒木寬畝花卉蘆鴈圖」「題荒木探令山水圖」「芝城會席玉池君永阪周贈畫梅扇一柄又賦贈一律余次韻賦梅一首酬」「題青琴女史山水圖」「疊用槐南韻贈中洲先生」「次韻和竹添光鴻」「次韻和宮本小一鴨北老人」「次韻和香國土居通豫」「次韻和高田潤環山」「次韻和永井久」「次韻和藍田股野琢」「次韻藍田老人」「次韻和九峯高島張」「次韻和舟塚原周」「次韻和大鳥圭介」「次韻和奎堂清浦奎吾」「次韻和羽峯南摩綱紀」「日下東作仁兄書贈一聯推許過當足成下聯而和之」「次韻和土屋保弘」「次韻和股野琢」「逸所乾三君以篆書贈嘉樂一章賦七截一首奉酬」「次韻奉和中洲侍講老詞伯 二首」「城山雅集賦贈青萍子爵」「次韻和中田敬義」
8月3日	大森屋（金沢）	「陪東宮訪春畝于大森屋」
	上野公園	「上野公園」「西鄉隆盛銅像」
	墨水	「墨水舟中答大倉君和歌」
	芝公園	「芝公園德川氏遺藏」
	芝離宮	「芝離宮」
	新宿御苑	「新宿御苑」
	後樂園	「後樂園」
	東京	「寫真」「觀活動寫真」
8月中旬	日光	「夜宿日光小西樓」「遊日光山」 「華嚴瀑布」「中禪寺湖」
8月17日	輕井沢	「泉源亭次青萍韻 二首」「聽琴次槐南韻時疾雷破山」「疊前韻聯句和青萍」「路上次槐南韻」
8月18日	布引山	「柳澤川邊庄不遇主人次槐南韻」「布引山釋尊寺 二首」 「黃梅樹」「車中次青萍韻」

8月19日	浅間山	「赴雨宮邀飲之局途中作」「贈雨宮次青萍韻」「青萍以淺間山名與仙鬢音同欲改淺間爲仙鬢戲賦一絕故次韻和之」「飲遠近山庄贈主人冷灰博士」「槐南追示布引山詩有溪巒朗映鬚眉古穩坐藍輿度碧山之句蓋指余而言而畫出當日光景也一笑和之」
8月20日	碓吹嶺	「登見臺次韻和青萍」「次韻和青萍」
8月21日	妙義山	「妙義山次青萍韻」「又次青萍韻」「臨行次青萍韻識別」「將還東京呈同遊諸賢」
	東京帝大	「觀東京帝國大學」
	東京	「東京雜絕 十首」「次韻和青萍」「祭詩龕復用前韻贈石埭主人」「贈百花園主人」「八百松樓石埭畫」
9月1日	赤坂	「次韻和春畝」「次韻和青萍」「次韻奉和三島侍講」
9月2日	東京	「離東京作 三首」
	京都	「西京雜絕 四首」
	大坂	「過大坂」
	下関	「馬關旅店主人請紀念詩吟一絕贈之」
	釜山	「還泊釜山」

『東槎謾吟』は、7月17日に下関へ到着後、春帆楼に泊まって書いた詩（「春帆楼懷古呈伊藤公爵」と「夜宿春帆楼」）に始まり9月初頭に釜山へ着いてから書いた詩（「還泊釜山」）で終わり、全103首の詩で構成されている。そのうちの大部分を占めるのは、7月29日の芝城山館での宴会で記した題画詩と唱和詩、そして8月16日から22日まで日光・妙義山一帯を遊覧して書いた唱和詩であり、その他、旅程で覚えた感懐を叙述した詩を収録している⁷。上で言及したように、これらの唱和詩は、日本でも『芝城山館納涼唱和集』および『輕妙唱和集』としてそれぞれ編纂され、同年の10月15日には『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』合本として秀英舎（現在の大日本印刷の前身）から出版された。

III. 『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』の編纂と構成

以下、『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』について記しておきたい。同書は上述のように、金允植一行が漢城（ソウル）へ戻り、約一か月後の1908年10月15日に秀英舎から発行された。『芝城山館納涼唱和集』は金允植が、『輕妙唱和集』は末松謙澄が、それぞれ序文を書いた。

『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集』の表紙には「(芝城山館) 納涼唱和集／輕妙唱和集／合本」という表題が書かれており、表紙をめくると「勝會風流／明新齋」と記された英親王の親筆署題が現れる。題詞の右上には「賢者而後樂此」（朱印長方形陰刻）、「明新齋」の下には「垠親王印」（朱印方形陰刻）、「明新齋」（朱印方形陽刻）など、英親王・李垠の印記3顆が押されている。続いて金允植が「隆熙二年戊申中元節」に作った「城山雅會集序」が現れる。隆熙2年は1908年、中元節は陰暦の7月15日である。陽暦では1908年8月11日に当たる。更に続いて、末松謙澄が「明治戊申八月初七日」に軽井沢の泉源亭で作成した「納涼唱和集緒言」が目に入る。その次の、末松謙澄が作

⁷ 唱和詩は、帰国前に伊藤博文の詩に次韻した「次韻和春畝」、末松謙澄の詩に次韻した「次韻和青萍」の2首の他に原韻は収録されていない。

成した「韓客略傳」には、金允植・高義敬・嚴柱益・徐丙協・鄭丙朝・金應善・金台錫・申海永ら 8 人の簡単な伝記が収められた。そして次の、末松謙澄が「戊申八月念五」、つまり 1908 年 8 月 25 日に泉源亭の観自在楼で作った「輕妙唱和集序」と、同じく末松謙澄作の「輕妙唱和集緒言」が続けて見られる。この後で『芝城山館納涼唱和集』の本文が始まり、これに続けて『輕妙唱和集』が収録された。

『芝城山館納涼唱和集』には 38 篇の唱和詩が収められているが、末松謙澄の「緒言」によると、朝鮮文人の詩を除いた諸家の作品は、詩書と絵画とを問わず全て金允植に贈られたものである⁸。これとともに 36 の書画及び著作の作者名（「書画著書」、金允植の題画詩 20 首（題画諸什）と次韻詩 26 首余（「賡和諸什」）が篇末に収録されている。「緒言」によれば、末松謙澄が諸家の作品を金允植に送ると、数日も経たず金允植がその題画詩を作り、またいくらか経たずして賡和詩を作ったという。

『芝城山館納涼唱和集』のため、1908 年 8 月 11 日に作成した金允植の序文は、「城山雅會集序」という題で書かれた。金允植一行は 8 月中旬に日光一帯を遊覧したことから、序文は遊覧を終える前に東京で作成したものと見られる。序文は以下のとおり⁹。

昔季子觀風，列國所至，必與其公卿大夫之賢者相交。趙孟聘鄭而宴，與諸大夫賦詩言志，飲酒樂，出而語人曰：「吾不復此矣。」盖言其樂之甚也。子輿氏曰：「友也者友其德也，不可以有挾。」若在同國取友，不能無所挾，如孟獻子之忘勢與夫能忘獻子之家者，盖亦鮮矣。故樂莫樂於天涯知己，心無所挾，快莫快於寄情詩篇，出乎性情之正也。余少有桑蓬之志，今焉漉落老白首，不敢作遠遊想。本年夏，奉勅東渡，使事既竣，滯留客館，青萍子爵為余置酒于城山園，為河朔之飲。簡邀當世之耆儒宿士鴻匠鉅工，以及女士之馳名繪苑者，咸來在座。鬚眉皓白，衣冠古雅，各通華刺，皆吾平日耳其名而所願見者也。是園也，有茂林修竹清泉白石，大有蘭亭之趣。於是安几於石床之上，行酒於松陰之下，或飲或歌，或棋或琴，轟笑暢談，不知日之將夕。既又擊牋磨墨，恣意揮灑，以詩畫紛紛相投，戢戢如束筍矣。余以駑步不能追天閑之逸足，收拾還寓，遊覽之暇，次第依韻和之，輯唱酬諸作，名曰城山雅會唱酬集，藏諸巾衍。青萍子復舐筐而取之，將付剗厥，以為他日紀念之資，且索弁文。余辭，不獲已，乃復于青萍子曰：允之此行，所得甚富，豈非暮年光華乎，允於季子趙孟，無能為役，然諸公皆一時之賢者也。乃折節與遠人交，共盡一日之權。肝膽相照，如秋月寒水。曠然無挾，吐屬清雅，發於天籟之自然，其樂可勝言耶，余將携卷歸國，常寘案頭。每一念至，輒開卷諷詠，凝神流涕，以慰停雲之思。文之工拙，又不足較也。

隆熙二年戊申中元節 清風金允植序

この序文の大意は次の通りである。

かつて、春秋時代に呉の公子の季札は、外交に秀でた使臣として魯・齊・鄭・衛・晋といった国々を訪問し、晏嬰・子産など列国の賢人と交流した¹⁰。同じく、春秋時代の鄭は強国の晋の実力者、趙

⁸ ただし、関沢清修の「城山堂納涼雅集賦此呈青萍貴爵併希大政」、大江孝之の「城山莊雅集賦呈青萍貴爵即乞大正」、中田敬義の「戊申七月廿九日末松青萍樞密城山館邀醺韓國金雲養中樞余亦見招以故不得往陪因依中樞韻賦燕詩一章以贈青萍子爵并請郢政」の 3 首は、末松謙澄に贈られたものである。

⁹ この序文は、『雲養集』巻 10、「序」に「城山雅會集序」という題で書かれている。内容は同じ。

¹⁰ 『史記』「吳太伯世家」。

孟を迎えて宴会を開き、趙孟は子展・伯有・子西・子産・子大叔といった鄭の公子たちと詩を賦して自分の志を述べ、また酒を飲んで楽しんだ。趙孟は門を出てとなりの人に「私に二度とこんな楽しみはないだろう」と言った¹¹。孟子は「友とは、その徳を友とするのであり、相手の年齢や富貴を信じて交際してはならない」とした。孟子が言ったように、孟献子が相手の勢力に気づかないことや他の者が孟献子の家族を忘れて相い親しんだことは、かなり稀なことである。したがって、友人との交際においては天涯知己（遠く離れていても互いを良く知る格別の友）ほど嬉しいものは無いが、それは心に私的な憎しみが無いためであり、その情を伝えるにおいて詩篇ほど愉快なものが無いのは、それが性情の正しさから出てきているためである。

私は若い頃には大志をもっていたが、今は元気のない老人となり、遠遊の想いを起こさなくなった。ところが、この年（1908年）の夏、詔勅を受けて訪日し、使臣の仕事のみな終えて客舎にとどまっていたが、青萍子爵（末松謙澄）が城山の庭園に酒宴を張って河朔の飲を行っては、当代の耆儒・宿士・鴻匠・鉅工、および女士で画壇に名を馳す面々を招待した¹²。城山の庭園には茂林・修竹・清泉・白石があり、晋の王羲之の蘭亭の雅趣がある。ここに、松の木陰で、或いは呑み、或いは唄い、或いは碁を打ち、或いは琴を弾き、笑い声と談笑の音があちこちで起こり、日が暮れるのを気付かないほどであった。また、紙を切って墨を磨り、心行くままに筆を揮って詩と絵を互いに贈りあうので、雨後の筍の如く作品が生まれた。

我が才は魯鈍な馬のようなもので、駿馬の速い足並みに追うことはできないため、詩文と絵を全て旅寓（旅館）に持ち帰り、遊覧の合い間次々と和韻し、唱和の作品を一つに編纂して「城山雅會唱酬集」と命名し、小箱にしまっておいた。青萍子（末松謙澄）がこれを開け、取って行って、刊行して後日の記念にしようとして私に序文を頼んできた。そこでお断りすることもできず、青萍にこのように答えた。「私の今回の旅程で得たものは大変多い。老いての栄華ではなかろうか。私は、季札と趙孟に比べると彼らの下僕にもならないけれども、詩文を送ってくれた諸公は当代の賢者たちである。それに、礼を以て遠方から来た者（金允植）と交流して一日の楽しみをともに満喫し、肝胆を相照らすこと、秋月と寒水のように、心開いて私的な憎しみなどない。また、清雅な心を表して書いた詩は、天籟の自然から出たのだから、その嬉しさを語り尽くすことはできない」と。

私（金允植）はこの詩集を携帯して帰国しようとしている。帰国後はこの詩集を机のそばにいつも置き、思い出す度に毎回、本を開いて吟じ、思いを一心に集めて涙を流し、友を懐かしんで心を慰めよう。文の巧拙は問題ではない、という言葉で序文を締め括った。

末松謙澄が作成した「納涼唱和集緒言」によれば、韓国の中樞院議長の金允植が詔勅を受けて来日して公務を終えた後に観光をしたが、7月29日に金允植を主賓として招いて芝の城山にある自身の家で納涼雅集を開いたということであり、このとき80人余りの名流の詩人や画家が参席したという。そのうち、60歳以上の人物としては、南摩綱紀（号は羽峯、文学博士、86歳）・重野安繹（号は成齋、文学博士、82歳）・熊谷直彦（書画家、81歳）・三島毅（号は中洲、東宮侍講、文学博士、79歳）・荒木寛畝（書画家、78歳）・大鳥圭介（号は如楓、男爵、枢密顧問官、76歳）・田邊太一（号は蓮舟、詩文家、75歳）・金允植（号は雲養、韓客、74歳）・杉孫七郎（号は聽雨、子爵、枢密顧問

¹¹ 『春秋左傳』襄公27年。

¹² 河朔の飲とは、夏に避暑をするという名分で準備された酒の席をいう。後漢末の劉松が袁紹の子弟と河朔で三伏（夏の最も暑い三つの時期）の頃に酒席を設けて酒を昼夜飲んだ故事に由来する。『初學記』卷3、「避暑飲・感涼會」。

官、詩書、74歳）・佐竹永湖（画家、74歳）・股野琢（号は藍田、博物館総長、詩書、71歳）・宮本
 小一（号は鳴北、貴族院議員、71歳）・日下部東作（号は鳴鶴、詩書、71歳）・伊藤博文（号は春畝、
 公爵、68歳）・秋月新太郎（号は天放、貴族院議員、詩文、68歳）・土屋弘（号は鳳洲、文章家、68
 歳）・花房義質子爵（宮内次官、67歳）・竹添進一郎（号は井井、詩文、67歳）・川端玉章（画家、67
 歳）・小牧昌業（号は櫻泉、貴族院議員、66歳）・佐和正（号は東野、65歳）・三浦梧樓（号は觀樹、
 子爵、陸軍中將、64歳）・永阪周（号は石埭、医家兼詩人、64歳）・高田潤作（号は環山、詩人、64
 歳）・高嶋張輔（号は九峰、図書寮主事、63歳）・田口乾三（号は逸所、63歳）・塚原周造（号は夢
 舟、61歳）・塚原靖（号は澁柿、文士、61歳）・望月金鳳（画家、61歳）などが参席した。また、他
 に名門家の人士には岩倉具定公爵（枢密顧問官侍従職幹事）・戸田氏共伯爵（式部長官）などが、文
 学の士としては清浦奎堂子爵（枢密顧問官）・杉溪六橋男爵（貴族院議員兼善詩画）・森槐南（宮内
 省編纂官）・土居香国・土肥鶚軒・永井禾原・徳富蘇峰・大江敬香・関沢霞庵などが、画家では渡辺
 華石・荒木探令・高嶋北海・益頭峻南・荒木十畝・小室翠雲・諸星成章・山岡米華らが、女性画家
 では奥原晴翠・武村香靄・跡見玉枝・馬杉青琴らが、統監府員では鶴原・鍋嶋・岩崎・古谷・高崎
 男爵・藤波通訳官の六氏が参席している。朝鮮の人士では金允植のほか、高義敬・徐丙協・嚴柱益・
 金応善などが参席した。

『芝城山館納涼唱和集』に収録された贈詩と金允植の和韻詩を合わせて挙げると、以下のとおり。

連番	作者	作品名	「廣和諸什」
1	金允植	賦贈青萍貴爵雅正兼乞列位老詞伯 斤教	
2	金允植	城山雅會賦呈末松青萍子爵二十二 韻	
3	股野琢	明治戊申七月廿九日末松樞府招韓 國中樞院議長金大人余亦與焉賦此 博大人一祭并乞政	1. 次韻三首奉和藍田詞伯大人（其 三）
4	股野琢	次春畝公芳韻却呈二首	1. 次韻三首奉和藍田詞伯大人（其 一・二）
5	清浦奎吾	末松爵樞雅集次春畝公韻金允植大 人祭正	17. 次韻奉和清浦奎堂大人
6	末松謙澄	弊廬雅集謹次伊藤統監詩韻似韓客 金中樞大人并正	
7	末松謙澄	草堂雅集奉次金中樞雲養先生席上 詩韻	
8	末松謙澄	金中樞賦五言長篇二十二韻見贈乃 次其韻却呈	
9	大鳥圭介	呈金老大人乞正	2. 次韻三首奉和大鳥如楓老詞伯
10	三浦梧樓	胸中之鷄肋寫以似金先生幸容閱	
11	三島毅	戊申七月念八日東宮醺韓國皇儲毅 辱陪侍恭賦一絕呈電覽并乞扈從金 中樞院議長高和	
12	三島毅	戊申七月念九末松氏設納涼會招韓 國金中樞院議長及都下名流余亦與 焉賦此呈議長乞高和	10. 次韻奉和中洲侍講老詞伯大人 （其二）

13	三島毅	末松氏席上贈金中樞議長	10. 次韵奉和中洲侍講老詞伯大人(其一)
14	南摩綱紀	末松君城山莊雅集席上贈呈韓國金中樞院議長閣下請正	4. 次韵奉和南摩羽峯詞伯
15	宮本小一	末松青萍君雅集席上呈金中樞院議長博察	16. 次韵和呈宮本鴨北老詞伯
16	森大來	戊申七月廿九日末松青萍子爵芝城山館邀醺韓國金雲養中樞余陪席末率賦蕪詩一章即請郢政	6. 次韵奉酬槐南詞宗
17	永阪周	青萍貴爵城山街邸納涼雅集席上賦五言小律一章呈雲養先生大人即希教正	
18	鄭丙朝	公爵伊藤太師韻散步以呈	
19	鄭丙朝	用雲養先生韻呈青萍子爵閣下	
20	鄭丙朝	用雲養先生贈青萍子爵五古二十二韻仍呈子爵閣下	
21	永井久一郎	末松樞密城山山莊雅集席上賦呈韓國中樞議長金公鈞正	7. 次的奉酬永井久詞伯
22	高嶋張輔	次春畝公瑤韻	18. 次韵和呈九峯大詞伯
23	塚原周造	城山閣消夏雅集席上賦呈金大韓樞宰并正	11. 次韵奉和夢舟詞伯
24	土屋弘	戊申七月念九末松樞密邀韓國金中樞長及諸名家開納涼筵於其城山邸弘亦得寵招賦此以呈	5. 次韵和呈土屋鳳洲詞伯
25	土肥慶藏	末松樞府納涼雅集呈韓國金中樞院議長請政	
26	土居通豫	末松青萍貴爵納涼雅醺謹賦呈韓國金雲養中樞院議長併乞鈞誠	15. 次韵奉和香國詞伯
27	高田潤作	青萍貴爵城山莊納涼雅會席上奉呈韓國金中樞院議長閣下祭正	13. 次韵奉和高田潤環山詞伯
28	関沢清修	次伊藤統監瑤韻呈雲養金先生併希吟定	
29	関沢清修	城山堂納涼雅集賦此呈青萍貴爵併希大政	20. 次韵奉和霞菴詞伯
30	田邊太一	城山莊納涼會席上率賦呈金大人正之	22. 次韵和呈田邊蓮舟詞伯
31	伊藤明瑞	奉呈金雲養先生鈞正	14. 次韵和呈伊藤明瑞賢契
32	杉重華	末松子爵邸雅會次統監伊藤公詩韻呈金中樞大人博一察	24. 次韵奉和杉重華老詞伯
33	秋月新太郎	青萍博士席上呈金大人次伊藤公韵	23. 次韵和呈秋月大愚詞伯
34	小牧昌業	芝城山館雅集次春畝公詩韻呈韓國金中樞大人請正	25. 次韵奉和櫻泉詞伯
35	徳富猪一郎	青萍子爵雅集攀春畝統監瑤礎	
36	大江孝之	城山莊雅集賦呈青萍貴爵即乞大正	

37	大江孝之	末松樞密山莊清集賦呈金中樞院長閣下即乞大正	26. 次韻和呈敬香詞伯
38	中田敬義	戊申七月廿九日末松青萍樞密城山館邀醺韓國金雲養中樞余亦見招以故不得往陪因依中樞韻賦蕪詩一章以贈青萍子爵并請郢政	21. 次韻奉和中田雪莊詞伯
			3. 次韻三首奉和竹添光鴻大詞伯
			8. 三浦觀樹大人書贈一轉語因其意作五言一絕以呈且求一粲
			9. 壘用槐南韻奉呈中洲先生
			12. 日下部東作仁兄書贈一聯推許過當足成下聯而和之
			19. 逸所乾三君以小篆書贈嘉樂一章賦七絕一首以謝之

『芝城山館納涼唱和集』の冒頭には、金允植の「賦贈青萍貴爵雅正兼乞列位老詞伯斤教」と「城山雅會賦呈末松青萍子爵二十二韻」が載せられている。末松謙澄は「草堂雅集奉次金中樞雲養先生席上詩韻」と「金中樞賦五言長篇二十二韻見贈乃次其韻却呈」を作り、金允植の詩に和韻した。その他、鄭丙朝が金允植の詩の原韻を書き、「用雲養先生韻呈青萍子爵閣下」と「用雲養先生贈青萍子爵五古二十二韻仍呈子爵閣下」を作って末松謙澄に贈り、中田敬義が「戊申七月廿九日末松青萍樞密城山館邀醺韓國金雲養中樞余亦見招以故不得往陪因依中樞韻賦蕪詩一章以贈青萍子爵并請郢政」という長い題名で金允植の詩に和韻して、やはり末松謙澄に贈った。また、朝鮮文人の詩を除いた諸家の作品が全て金允植に贈られたものとした末松謙澄の「緒言」とは異なり、関沢清修「城山堂納涼雅集賦此呈青萍貴爵併希大政」・大江孝之「城山莊雅集賦呈青萍貴爵即乞大正」・中田敬義「戊申七月廿九日末松青萍樞密城山館邀醺韓國金雲養中樞余亦見招以故不得往陪因依中樞韻賦蕪詩一章以贈青萍子爵并請郢政」の3首は実際には末松謙澄に贈られたものである。

一方、『芝城山館納涼唱和集』に収められた全38篇の詩のうち、以下の10篇の詩は伊藤博文の原韻に次韻する形式を取る。金允植の詩に次韻した者は、末松謙澄と鄭丙朝の二人であった。

股野琢「次春畝公芳韻却呈二首」

清浦奎吾「末松爵樞雅集次春畝公韻金允植大人粲正」

末松謙澄「弊廬雅集謹次伊藤統監詩韻似韓客金中樞大人并正」

鄭丙朝「公爵伊藤太師韻敬歩以呈」

高嶋張輔「次春畝公瑤韻」

関沢清修「次伊藤統監瑤韻呈雲養金先生併希吟定」

杉重華「末松子爵邸雅會次統監伊藤公詩韻呈金中樞大人博一粲」

秋月新太郎「青萍博士席上呈金大人次伊藤公韻」

小牧昌業「芝城山館雅集次春畝公詩韻呈韓國金中樞大人請正」

徳富猪一郎「青萍子爵雅集攀春畝統監瑤礎」

他方、8月中旬から日光などを旅行して16日に軽井沢へ行き、末松謙澄の泉源亭で22日まで軽井

沢と妙義山の一帯で開かれた宴会において唱和した詩は『輕妙唱和集』に収められた。朝鮮の人士では金允植・鄭丙朝が、日本の人士では末松謙澄・森大來・永阪周・江木衷（号は冷灰）らが参加して詩文を唱和している。『輕妙唱和集』は、当時唱和した詩文以外にも、金允植一行が遊覧以後に東京へ戻り、9月2日の帰国前に、伊藤博文・末松謙澄・森大來・永阪周・江木衷・内野悟（号は皎亭）といった多くの者と唱和した詩や、末松謙澄が東京の芝城山館へ戻ったあと秋雨が寂々と降っていた日に森大來とともに談笑し、以前、輕井沢で逍遙しながら書いた詩文に再び和韻した詩に加え、更に金允植が日本滞在の旅程で著した詩10首余りを附録として、ともに収録する。序文は末松謙澄の作である。末松謙澄はこの序文を、遊覧を終えて三日後の8月25日に、自身の泉源亭の觀自在樓で作った。以下に「輕妙唱和集序」を挙げておく。

輕妙唱和集者何，集輕井澤及妙義山探勝唱和之詩也。今茲八月中澣，韓客金中樞遊日光，其十六日，轉入輕井澤，訪我泉源亭，鄭副贊・藤波通譯隨焉。會江木冷灰在其遠近山莊，永坂石埭・森槐南，亦前後自東京來游。於是乎相謀探討近傍諸勝，時或設席行酒，商紳雨敬又避暑其愛樹莊，數往來助興，小諸光岳寺勇海師，與予有同鄉之誼，遊釋尊寺之日，伴諸同人過訪，隣局有志之徒，歡迎一行，張宴於寺中。二十一日予與槐南導中樞及鄭藤二人遊妙義，一宿山中，翌日一行皆歸東京，予獨送至高崎而還。計自十六日至二十二日，終始朗晴，如有天助，唯十七日，雖雷雨驟至，不害勝遊，以其在置酒中也。茲遊也，諸同人皆心會交融，唱和如湧，所得之詩，及百數十首，篇篇皆可誦。特於中樞，諸同人均服其吐囑勁健，又屢驚攀崖冒險之勇，所謂老而益壯者有焉。予也弱冠投筆，偶作詩文，不過一時遊戲，今與諸名流，徵逐累日，得占一席於此集者，雖有斥鷃伍鵬之嫌，亦實近時一快事矣。聊記此集所以成以為序，是日烟雨冥晦，東望諸同人於天一方，回憶昨遊，快久之。

戊申八月念五於泉源亭觀自在樓上

青萍 末松謙澄 撰

この序文の大意は次の通りである。

『輕妙唱和集』は、輕井沢と妙義山で名勝の地を遊覧して唱和した詩を集めたものである。8月中旬に金允植が鄭丙朝と通訳官の藤波とともに日光を遊覧し、16日に輕井沢へ行き、末松謙澄の泉源亭を訪問した。折り良く江木冷灰が遠近山莊に居り、永坂石埭と森槐南もその前後に東京で遊覧してきた。そうしてともに近辺の名勝地を訪ね遊びに出たが、商紳（紳士と称されるほどの身分の商人）の雨敬もまた愛樹莊で避暑をしており、しょっちゅう訪ねて来ては興を添え、故郷の旧友である光岳寺の勇海師が釋尊寺を逍遙していたときに多くの友人とともに訪ねてきたので、隣の心有る人たちが一行を歓迎して寺の中で宴会を催した。21日に金允植一行は、末松謙澄と森槐南の案内で妙義山を遊覧して山中で一晩過ごし、その翌日に全員で東京へ戻っている。8月16日から22日までの間、17日に夕立が降ったのを除けばずっと晴れており、この遊覧で唱和した詩は百数十篇にもなった。

末松謙澄は「輕妙唱和集緒言」を作成する中で、この詩集が主に輕井沢と妙義山で唱和した詩を集めたものであり、尊称と形式的な文字は省略して簡略に努めることで親愛の意を示すとした。また、詩集の編纂に際しては森槐南に多くの助力を得たとする。以下に『輕妙唱和集』所収の詩文を挙げる。

連番	作者	作品名	『東槎謾吟』（『雲養集』所収）
	八月十七日泉源亭醺集詩		
1	森大來	初筵即賦用青萍貴爵既望見寄原韻	
		附原作	
2	末松謙澄	疊韻呈客	
3	永阪周	次韻	
4	金允植	同上	72. 泉源亭次青萍韻（其一）
5	鄭丙朝	同上	
6	末松謙澄	又疊前韻	
7	金允植	疊前韻	72. 泉源亭次青萍韻（其二）
8	末松謙澄	三疊前韻答韻雲養	
9	江木衷	前有青萍貴爵見眎次其韻率賦	
		附原作	
10	森大來 末松謙澄 金允植 永阪周 鄭丙朝	雷雨驟至戲作聯句	74. 疊前韻聯句和青萍
11	江木衷	次韻	
12	森大來	酒酣三松女士彈三絃作淨瑠璃調合座傾聽依聯句韻賦之	
13	永阪周	同	
14	金允植	同	73. 聽琴次槐南韻時疾雷破山
15	鄭丙朝	諸君依來韻余獨依五律韻賦之	
16	森大來	我猶依來韻	
17	鄭丙朝	因更賦二絕贈槐南	
18	金允植	席將散依韻志感	未収録
19	末松謙澄	口占以擬留髡	
	八月十八日布引山紀勝詩		
20	森大來	車中口占	
22	金允植	次韻	75. 路上次槐南韻
23	永阪周	同	
24	末松謙澄	同	
25	鄭丙朝	同	
26	末松謙澄	慰柳澤氏禎莊即吟	
27	金允植	次韻	76. 柳澤川邊庄不遇主人次槐南韻
28	鄭丙朝	同	
29	森大來	同	
30	永阪周	大久保村柳澤禎莊宅次青萍博士韻	
31	江木衷	同	
32	森大來	釋尊寺	
33	金允植	次韻	未収録
34	永阪周	同	

35	金允植	又得三絶	77. 布引山釋尊寺二首 78. 黃梅樹
36	鄭丙朝	又得一律	
37	末松謙澄	瑠璃殿	
38	金允植	次韻	未収録
39	森大來	同	
40	末松謙澄	戲似石埭（用前夜雷韻）	
41	永阪周	答青萍（依空韻）	
42	江木衷	次韻	
43	末松謙澄	小諸光岳寺作	
44	森大來	同	
45	金允植	次槐南韻似會同諸子	未収録
46	鄭丙朝	贈勇海上人	
47	末松謙澄	座有吹洞簫者	
48	末松謙澄	歸輪即興	
49	森大來	次韻	
50	金允植	同	79. 車中次青萍韻
51	鄭丙朝	同	
		紀布引山遊（青萍舊製附記）	
	八月十九日招謙唱廣詩		
52	金允植	雨宮氏愛樹莊招飲途中作	80. 赴雨宮邀飲之局途中作
53	金允植	謙中即賦	81. 贈雨宮次青萍韻
54	末松謙澄	次雲養韻	
55	末松謙澄	更次雲養韻	
56	森大來	和雲養絶句	
57	森大來	和清平	
58	永阪周	次雲養七律韻	
59	金允植	青萍子爵、以淺間與仙鬢音同、欲改山名為仙鬢、戲賦一絶、故次韻和之	82. 青萍以淺間山名與仙鬢音同（日本音）欲改淺間為仙鬢戲賦一絶故次韻和之
60	金允植	又次韻一絶	未収録
61	鄭丙朝	贈雨宮氏依諸公唱和韻	
62	鄭丙朝	青萍公改淺間山名以仙鬢盖日本字音相同而有可以出色詩律也步原韻以呈	
63	末松謙澄	予亦更賦一絶	
64	金允植	晚飲江木冷灰遠近山莊席上次檀欒原唱韻	83. 飲遠近山庄贈主人冷灰博士
65	末松謙澄	同上	
66	森大來	同上賦呈雲養依其愛樹莊七律韻	
67	鄭丙朝	偶題二絶	
	八月二十日確吹嶺詩		
68	末松謙澄	見晴臺上望妙義連山口占以似諸同人	

69	金允植	和青萍	85. 登見臺次韻和青萍
70	永阪周	同	
71	鄭丙朝	同	
72	森大來	同	
73	末松謙澄	山中勸蕎麥戲賦	
74	金允植	和青萍	86. 次韻和青萍
75	末松謙澄	歸路得一絕疊韻	
76	末松謙澄	更得一絕用十八日歸輪韻	
77	末松謙澄	戲似石埭（附前詩）	
78	永阪周	答青萍仍用還韻	
79	末松謙澄	再疊更戲似石埭	
80	永阪周	是日下山車過妙義山下有懷信山同遊諸公因用確嶺倡和韻賦寄	
		確水嶺望妙義連山（青萍舊製附記）	
	八月廿一日發輕井澤至妙義詩		
81	金允植	將還東京呈同游諸君子	90. 將還東京呈同遊諸賢
82	末松謙澄	妙義山次雲養長古韻奉酬	
83	森大來	同上	
84	永阪周	次金中樞長古韻紀確嶺之游兼呈同游諸公時余先還東京故有此作	
85	鄭丙朝	發輕井澤述事志感	
86	金允植	下確嶺即事	未収録
87	末松謙澄	次韻	
88	末松謙澄	途上口占	
89	金允植	昨槐南詩有溪巒朗映鬚眉古穩坐藍輿度碧山句偶拈一絕	84. 槐南追示布引山詩有溪巒朗映鬚眉古穩坐藍輿度碧山之句蓋指余而言而畫出當日光景也一笑和之
90	森大來	次韻	
91	鄭丙朝	同上	
92	森大來	石門次雲養下確嶺即事韻	
93	森大來	山中口占	
94	金允植	次韻	87. 妙義山次青萍韻
95	金允植	此山詩甚難、終日撚髭、竟出此陳腐語、我國先輩嘗游金剛山、不能作一句而還、良由此也	88. 又次青萍韻
96	末松謙澄	晚投養氣館將以明朝東西相別用確水嶺詩韻作	
97	金允植	次韻	89. 臨行次青萍韻識別
98	鄭丙朝	同	
99	末松謙澄	談次偶聞韓俗謂律詩平仄圖式為詩簾二字甚新因戲作一絕	
100	金允植	次韻	未収録
101	鄭丙朝	妙義紀游詩	
102	末松謙澄	次葵園長古韻	

103	末松謙澄	次葵園志感六首韻似同遊諸君	
104	森大來	二十二日下山用葵園長古韻志別	
	附錄： 金中樞一行既還東京以九月二日就歸途其間猶有諸同人唱和今隨得附于茲		
105	末松謙澄	八月二十六日永坂石埭玉池祭詩龕招飲予在山不得赴會賦此遙寄	
106	金允植	祭詩龕夜會次青萍韻和送泉源亭	93. 次韻和青萍
107	金允植	復用前韻呈石埭	94. 祭詩龕復用前韻贈石埭主人
108	永阪周	祭詩龕小集席上用青萍貴爵見寄詩韻賦此以贈雲養中樞	
109	江木衷	同上次韻	
110	内野悟	同上	
111	鄭丙朝	同上	
112	森大來	玉池詩龕讌識集作雜贈詩用葵園輕井澤述事志感詩韻	
113	内野悟	二十八日、金中樞以下諸同人冒雨賞江東百花園秋色、留小照為紀念、再用詩龕前韻戲賦	
114	金允植	百花園偶占	95. 贈百花園主人
115	永阪周	次韻	
116	森大來	同上	
117	森大來	二十九、日雲養中樞招讌紅葉館、觀浣紗舞技、戲填浣溪紗詞一闕、遵詞統所收明吳匏庵詞平仄、是日典觴者、鶴兒最豔、詞中故云	
118	金允植	次韻	未収録
119	鄭丙朝	同上	
120	永阪周	余不善倚聲因用其韻勉成七律一篇聊叙離悵	
121	伊藤博文	三十日三河樓話別小集席上作	
122	金允植	次韻	97. 次韻和春畝
123	鄭丙朝	同上	
124	森大來	同上	
125	永阪周	同上	
126	末松謙澄	金中樞將西歸賦此遙寄以代題襟	
127	金允植	次韻奉和	98. 次韻和青萍
	又附錄： 予既歸京在芝城山館一日秋雨蕭條槐南來話有唱和尋有古重陽唱和因更附于茲以事猶與本集相關也		
128	末松謙澄	槐南來話賦此紀實以似	
129	森大來	即事即興奉和	
130	末松謙澄	疊韻又賦時日既暮	
131	森大來	同上	

132	末松謙澄	談及前年觀楓之遊	
133	森大來	疊和	
134	末松謙澄	前年觀楓之遊、本田種竹、大久保湘南在同人中、客歲二人前後長逝、二人詞藻、極為不易得之才、而今也亡矣、詞壇為之頓覺索莫、如今次輕妙雅游、少二人甚為可惜、酒間談及此事、因賦、仍依前韻	
135	森大來	疊和	
136	末松謙澄	予亦更賦一絕寄懷金鄭二氏	
137	永阪周	戊申古重陽前二日讀芝城山館唱和詩因次其韻賦二絕句以題其後	
138	末松謙澄	古重陽槐南石埭同至此日朗晴仍依前韻	
139	森大來	次韻	
140	永阪周	同上	
141	末松謙澄	槐南愛酒石埭嗜茶因茶後更侑酒戲疊以似	
142	末松謙澄	又一絕似石槐二氏兼寄金鄭二氏	
	又附録： 金中樞乘槎以來詩隨得抄錄其十餘首以資同好賞鑑		
143	金允植	舟行絕句	未収録
144	金允植	春帆樓懷古呈伊藤公爵	2. 春帆樓懷古呈伊藤公爵
145	金允植	滄浪閣呈春畝公爵	9. 滄浪閣絕句三首呈春畝（其二）
146	金允植	祇謁東宮退賦一律	10. 祇謁東宮退賦一律
147	金允植	陞見豐明殿	11. 陞見豐明殿
148	金允植	青山宮謁日本皇太子承命製進	15. 青山宮謁日本皇太子索詩承命呈一律
149	金允植	寫真館攝影	66. 寫真
150	金允植	遊日光山詩	69. 遊日光山
151	金允植	宿小西樓	68. 夜宿日光小西樓
152	金允植	華嚴瀑布	70. 華嚴瀑布
153	金允植	中禪寺湖	71. 中禪寺湖

IV. 金允植と日本人官僚・文人との唱和詩が持つ外交的意味

7月29日、末松謙澄の芝城山館で開かれた納涼雅集には、伊藤博文をはじめ、政界・文化界・名門家の人士80名余りが参加し、一大外交場と化した。したがって、この集いで贈り贈られた唱和詩は、個人間の私的な誼を通じるただの交遊詩の性格を超え、国家外交の公式の席上で国家の公的な立場のことをやり取りする外交詩の性格を帯びていたと言える。金允植の場合、朝鮮使節団の代表格として集いに参加したため、尚更そうであった。

この宴自体は金允植を主賓としていたけれども、そこで詞宗の役を担ったのは伊藤博文であった。当時、伊藤博文は「戊申七月二十九日芝城山館雅集席上」という題の詩を残しており、この詩は『伊

藤公全集』第1巻に収録されている（小松，1927：111-112頁）。

為兄為弟幾千年，青史傳來尙歷然。不說鬪墻私忿迹，同文別有好因緣。（下平聲一先韻）

（日本と韓国が兄弟国であったのは何千年も前からのものであり、その事実は歴史書にはっきり記録され、今に伝わる。相い争って私かに憤った跡が無いのは、同文という特別な良き縁があるためだ。）

『伊藤公全集』には、上の1首のみを収録しているが、股野琢の詩の第2首や清浦奎吾の詩などは原韻と同じく下平聲一先韻を用いず上平聲十一真韻を使用しており、このことから、伊藤博文の詩は本来2首あったことが分かる。金允植もまた伊藤博文の詩に和韻しており、その詩は「城山席上次春畝韻」という題で『東槎謾吟』に収録されている。

天祚吾東共永年，政如魯衛弟兄然。一樽談笑披肝膽，不是尋常翰墨緣。

（天、福を賜りて、我が東洋は共に永遠ならん、これ正に魯国と衛国が兄弟の如きであったのと同じ。一樽の酒で談笑し腹を割る間柄である。これは普通の文筆の縁ではない。）

伊藤博文の詩は「兄弟国」と「同文」を強調しており、金允植はこれに和酬して「吾東」と「魯衛の兄弟国」に言及する。金允植が「魯衛弟兄」云々としたのは、『論語』「子路」篇の「魯衛之政，兄弟也。」という文言から出てきたものである。朱熹の「集註」によれば、魯は周公の封国で、衛は周公の弟に当たる康叔の封国であるのでそもそも兄弟国であったが、孔子時代に衰退・混乱して政治状況もまた同様であったので、孔子が嘆息して出た言葉だという。「我が東洋 [吾東]」「同じ文字 [同文]」「兄弟の国 [為兄為弟]」は、当時の朝鮮と日本との関係、或いは将来作っていかねばならない朝鮮と日本との関係を象徴的に示す言辞でもあった。

東洋の三国が連帯して西欧の侵略を防がねばならないとする言わばアジア連帯論は、1880年代初頭から日本で主張された。東洋三国は運命を共有しており、西洋勢力の東漸現象に伴う唇齒輔車の関係と見たわけである。1880年、海軍の曾根俊虎らの主導で設立され、西洋とロシアのアジア進出に対応するために朝鮮・清・日本の三国連携を主張した興亜会は、このアジア連帯論で中枢的な役割を果たした。朝鮮人としては、1879年に日本へ密航した李東仁、1880年の第2次修信使随員員の姜瑋・李祖淵・尹雄烈、1882年に特命全権大臣兼修信使として派遣された朴泳孝と顧問として日本に渡った金玉均などがこの興亜会に参席している。興亜会のアジア連帯主義は、1880年代初頭に朝鮮の開化派たちが明治政権をモデルに朝鮮を改革しようとしたとき、その路線を正当化する基盤にもなった。日本を中心とするアジアの連帯は、同種同文を土台として容易に伝播し、1910年の日本による韓国植民地化の過程でも、日本側と朝鮮国内の同調者たちは、ロシアと西欧の帝国主義の侵略を防ぐための手段として韓日合邦（日韓併合）の必要性を正当化した。金允植もまた、この興亜会に通常会員として加入し、日本の人士と交流している¹³。

初期の金允植は、やや否定的な日本観を持っていた。明治維新についても、清の洋務運動と同じく西洋の長所だけを取るものではなく、伝統を捨てて完全に西洋化したという点で相当批判的な立

¹³ 以上、アジア連帯論については（朴，2006：44-65頁）を参照。

場にいた。こうした日本観は、流刑を解かれ赦免されて以降、晩年に外交官として本格的に日本の実力者たちと接触するうちに変わっていき、侵略する「西洋に対抗し東洋を保とうとする意を持つのは日本一国のみ」¹⁴ と言い、日露戦争は日本が西洋の非道徳国家に対抗して戦う「正義の戦争」と評価するに至る。こうした日本観は、戊戌の政変以降、清が急速に衰退し、日本が東洋の新たな強者として浮上するにつれてより加速していった（金聖培，2009：206-211頁）。

さらに、末松謙澄もまた、「弊盧雅集謹次伊藤統監詩韻似韓客金中樞大人并正」という題で伊藤博文の詩に次韻した詩を残している（末松，1922：巻8「戊申」）。

唇齒相依久有年，呼為魯衛豈徒然。善隣不獨敦槃事，文字修盟亦宿緣。

（両国が齒と唇のように互いに依拠した歳月は既に長く、魯国と衛国のように兄弟の国だというのはどうして言葉だけのものであろうか。両国の友好関係はただ敦槃のことにのみならず、文字もて盟約を交わすこともまた、長きにわたる縁のなせるわざである。）

敦槃とは玉敦と珠槃のことで、天子あるいは諸侯が盟会する際に使用した礼器である。『周禮』「天官・玉府」に、「敦以盛食，槃以盛血，皆用木製，珠玉為飾。」とある。後に賓主の聚会や使節の往來を意味する言葉として使用されるようになる。末松謙澄もまた、両国の関係を唇齒の関係として両国が運命共同体の関係にあることを強調する一方で、両国は文字で結んできた長らくの縁があったことを特記している。伊藤博文・金允植・末松謙澄はいずれも、両国が東アジアの運命共同体として同じ文字を使う特別な縁でつながった兄弟の国として長らく友好関係を結んできたことを力説しているのである。

末松謙澄は、伊藤博文の詩に次韻した詩のほか、金允植の詩に次韻した「草堂雅集奉次金中樞雲養先生席上詩韻」と「金中樞賦五言長篇二十二韻見贈乃次其韻却呈」の2首を残している。「草堂雅集奉次金中樞雲養先生席上詩韻」は、以下のとおり（末松，1922：巻8「戊申」）。

多謝明時澤，草堂亦集靈。自忘三伏熱，忽簇老人星。四顧皆眉白，相逢悉眼青。更欣詩畫妙，月露是新形。

（明るい時代の恩沢に深く感謝したことで、我が草堂にもまた秀でた者が集まった。三伏の暑さを自ずと忘れたが、忽然と多数の老人星が輝いている。四方を見回せば白眉の老人ばかりだが、相い見えて青眼で好誼を分かち合う。詩画が一様に絶妙であるので一層嬉しいが、折り良く姿を現したのは、新月である。）

老人星とは、老人の長寿を象徴する南極星（カノープス）で、寿星ともいう。ここでは、宴会に集まった多くの元老らや詩画の老大家を指す。新月は、少しずつ満ちていく月であることから、興盛や長寿を祈り願う意でよく使われる。『詩經』「小雅・天保」の「如月之恆，如日之升。如南山之壽，不騫不崩。如松柏之茂，無不爾或承。」から来た言葉である。ここでは、両国の友好関係が長らく持続することを願うという意味となる。

¹⁴ 金允植（1960）『續陰晴史（上）』。

これに対する金允植の原唱「賦贈青萍貴爵雅正兼乞列位老詞伯斤教」¹⁵は、以下のとおり。

未覺紅塵近，幽居愜性靈。林間留寶墨，海内聚文星。盛世今垂白，他郷更拭青。不須傳繪畫，相對已忘形。

(紅塵の世が近くに在ることを知り得ぬ程に幽玄な所で性霊を爽快にせんとする。木々生い茂る長閑な所で宝の如きふみを残したのは、ここに集まった海内の優れた文士たち。私は斯様な盛世にてもう白髪になったのだが、他郷で青眼を再び拭い、良い友らとの交際を喜ぶ。我らの出会いを必ずしも絵画で伝えることはない。互いに向かい合えば、すでに忘形の交を結んでいるのだから。)

金允植は塵界から抜け出て清浄な芝城山館とそこに集った多くの文人たち、彼らと晩年に交流を味わう喜びを謳う、末松謙澄は明治維新以降の盛世を謳歌しているこの時に各界の多くの元老たちが参加する宴席で両国の人士が青眼（好意的な意を持つ目）の交わりを持って精神的なつながりを形成しており、こうした両国の友好が永遠に続くものと和酬した。

金允植が末松謙澄に贈ったもう一つの詩は「城山雅會賦呈末松青萍子爵二十二韻」¹⁶である¹⁷。

少小喜結交，遠遊慕史遷。白首尚匏繫，閉戸事鑽研。何圖桑榆景，乘槎到漢邊。偉哉青萍子，相識已多年。夜登滄浪閣，握手仍歡延。入都少親知，惟公實後先。窈窕城山園，巖壑帶清泉。爲我治潔樽，招邀集群賢。華髮映池水，飄飄若神仙。箕踞長松下，鬪健賦新篇。有酒如澠淮，揮毫落雲烟。酣吟殊暢適，幽賞勝管絃。此樂足平生，肝膽秋月懸。青萍金閨彦，待客情殷拳。壯年從戎幕，盾鼻草檄傳。中歲志四方，西遊得眞詮。歸來佐明主，彌良功濟川。時賢推樂廣，壺範稱桓宣。授我儲君學，橫經講离筵。蚤論培國本，功化被八埏。茲事關大局，邦交賴益堅。豈徒懷私惠，大道本無偏。

金允植は、詩において、自身が晩年に日本へ使臣として訪れた際に、末松謙澄が自身の為に宴席を準備してくれたこと、その中で多くの元老たちと交流したこと、また、末松謙澄が西欧に留学し、帰国後、日本の近代化に大功を打ち立てたことなどを叙述している。その上で、詩の末尾において、謙澄が英親王に学問を授けたことを取り上げている。金允植は、英親王への教育は、情勢の大局と関係することであるため、これを通じて両国の関係がより堅固になるものと考えた。また、これは朝鮮一国のためだけの、いわば朝鮮の私益となるものではなく、本来の不偏不党の大道の立場から実施されるものであることがよく分かっているという文言で詩を締め括る。

これに対し、末松謙澄は「金中樞賦五言長篇二十二韻見贈乃次其韻却呈」という題で唱和した。詩の原文を以下に挙げる（末松，1922：巻8「戊申」）。

隆替有源委，世運與時遷。古今成敗迹，中外待精研。是故言命駕，觀風來日邊。皤皤金中樞，壯

¹⁵ 『東槎漫吟』には「賦贈青萍貴爵兼乞列位詞伯評正」という題で載せられている。

¹⁶ 『東槎漫吟』には「城山雅集賦贈青萍子爵」という題で載せられている。

¹⁷ 金允植のこの詩とそれに対する末松謙澄の唱和詩については、キム＝ヨンテ氏によって検討されたものがある。氏は、末松謙澄の唱和詩は甚だ露骨に「日本中心的」視点を見せているとした（金龍泰，2014：82-85頁）。

志壓青年。此日拋公事，鷄黍任我延。欣然握我手，忘却聞道先。諸友亦相聚，同坐我林泉。下物雖淡泊，酒幸有聖賢。几席雖素樸，客皆似神仙。風丰帳樹石，至情溢詩篇。林下清風到，暮山凝紫烟。此時陶然樂，不遑問管絃。却思經國務，在解民倒懸。古聖垂明訓，服膺應拳拳。中樞通大局，達見固足傳。豈不思私情，道民有真詮。不知同人利，安能涉大川。文明宜立本，此義要普宣。肝膽互相照，須如詩酒筵。連鑣以邁往，晨光及八埏。東方萬歲基，冀得久且堅。天意元公明，雨露豈有偏。

（或る国が興盛し衰退するのには原因があり、世運は時間と共に移り行く。古今の成敗の跡は、朝廷の内外で精密な研究が期待される。そのため公は遠路はるばる、ここ日本まで国ぶりを視察しに来た。公のため、林泉のある我が邸宅で用意された宴会に多くの神仙のような人士が集まり、美しい景色を鑑賞し酒を飲んで詩を詠うので、この時の喜びは言葉にし尽せない程である。しかし、こうした歓楽のときにこそ、却って経国の務めが苦境に陥った民衆を救うことにあることを思い、古聖の明訓を当然の如く心に刻んで忘れないようにせねばならない。公は大局に通じ、その達見は実に長く後世に伝わろう。どうして私情を思わぬことがあろうか、しかし民衆を導くには真詮がある。同人の利を知らねば、大川を渡れないのである。文明はまさに根本を打ち立てねばならず、この義理はまさに広く普及させねばならない。互いの心を明るく照らし合うことは、すべからず詩酒の宴会であると同様にすべきである。両国が共に進んでいくなれば、晨光が八方に明るく照り、東方万歳の基が堅固且つ永久となろう。天意は本来公明で、雨露の如き恩沢がどうして偏るであろう。）

末松謙澄は、唱和詩の冒頭（第一連から第三連）において、次の二つの事実を指摘している。第一に、世運は時代と共に常に移り行くものであり、今はそれが日本へ移っているとする点。第二に、或る国の興亡盛衰にはその原因があり、こうした古今の盛衰は理念的な歴史書でなく歴史の現場それ自体で確認できるという点。東アジアの情勢は大きく変化して、その主導権が清から日本へ既に移っており、今の世は古今の盛衰の足跡について旧来の歴史書を通じて見極めることのできた伝統社会の段階を超えて、近代国家という全く新しい時代を迎えていることを指摘しているのである。そして、これこそが、金允植が老軀に鞭打って、遠く東京へ来た理由でもあった。

末松謙澄は、金允植が大局をよく見通しており、その達見は実に後世へ伝えるに足るものだとした。「大局」とは、急変する東アジアの情勢、より詳しくは、東アジアの覇権が日本へ移った局面を意味し、これは金允植と末松謙澄が応酬した唱和詩の詩眼となる。金允植は英親王への教育が情勢の大局と関係することなので、これを通じて両国の関係がより堅固になるものとし（「茲事關大局，邦交頼益堅」）、末松謙澄はこれに和酬して、金允植がこうした東アジアの情勢を正確に把握したのはその達見によるもの（「中樞通大局，達見固足傳」）と、高く評価したのである。

謙澄の詩にいう「同人の利」とは、『周易』「同人卦」にある言葉である。「同人卦」の卦辞に「同人于野，亨。利涉大川，利君子貞。（人とともにあるが、野においてであれば亨通するだろう、大川を渡ることが利であり、君子の貞とすることが利である）」とある。この註解は『周易本義』で次のようになされる。

同人，與人同也。……于野，謂曠遠而无私也，有亨道矣。以健而行，故能涉川。爲卦内文明而外剛健，六二中正而有應，則君子之道也。占者能如是，則亨而又可涉險。然必其所同，合於君

子之道，乃爲利也。

(同人は、他の者とともにすることである。……野においてともにするというのは、曠遠にして無私であることをいうので、亨通する道があるのである。剛健さを以て行うことで大川を渡ることができる。この卦は、内は文明にして外は剛健であり、六二が中正にして応があるので、君子の道なのである。占う者がこのように言うならば亨通し、また險難を渡ることができる。しかし必ず共にする者が君子の道に合わなければならず、そうであってこそ利するのである。)

末松謙澄は、同人の利を知らなければ大川を渡れないとし(「不知同人利，安能涉大川」)、私欲の無い君子の道を以て朝鮮のパートナーとなって民衆を導くのだとした。また、両国の宴会にてするのと同じく互いの心を明るく照らし、共に進むならば、東方の基盤が堅固になり、万年の如く永久に伝わるのだと言っている。現在は東アジアの秩序が日本を中心として再編される過程にあり、こうした新たな大政局に朝鮮が積極的に参与するのを促しているのである。

末松謙澄は最後に、金允植が皇太子の教育に関連して「どうしてただ私益のような恩沢を考えようか、大道はそもそも偏りが無いのである(豈徒懷私惠，大道本無偏)」といったことについて、天意はそもそも公明なので、雨露のように恩沢に偏りが無いのだ(「天意元公明，雨露豈有偏」)という言葉で和酬して詩を括った。しかしこれは、単に皇太子の教育にのみ限って交わした会話ではないであろう。二人は、日本によって進められている東アジアの文明化と、日本を中心に改変されつつある東アジアの新秩序の構築が、日本一国の私益のみに利する計策ではなく、不偏不党にして公明正大な天意より出たものであることを一方で確認し、一方で強く願っているのである。

V. おわりに

金允植は、1907年6月に赦免されて朝廷に戻った後、伊藤博文の生日宴(誕生日を祝う宴)に参席して祝寿詩を献上した。「賀伊藤春畝公爵生朝」という題で『雲養集』巻6に収録されている。

報國深誠老未休，東洋全局在心籌。山樓夜讌騰觴祝，鶴笛聲中又一秋。

(報国の為の伊藤公の深い誠意は老いても尽きず、東洋の全政局は心計のうちにある。山中の楼閣で開かれた夜宴に参席して盃を挙げて長寿を祝い、長寿を詠う鶴笛の音にまた一秋を迎える。)

報国に対する伊藤公の深い誠意は老いても尽きることはなく、心の中で、東洋の政局のすべてを把握し計算している。山中の楼閣で開かれた夜宴に参加して盃を挙げて長寿を祝い、長寿を詠う鶴の鳴き声が聞こえるなか、また秋を迎える。

そう詠って程無くして、1909年に伊藤博文が安重根に狙撃されて死亡したときには、哀悼の詩3首を寄せている。「哭春畝公爵」という題で『雲養集』に載せられた。第2首のみを以下に挙げる。

慟哭人間萬事非，良工心苦有誰知。爲邀東亞生民福，來作西隣帝子師。桑土此時備陰雨，葵丘他日會裳衣。太平成績不親見，空使英雄恨淚滋。

(世の中のことが間違いばかりであることを痛哭する。良工(伊藤博文公)の苦心を誰が理解す

ることができようか。東アジアの人民に幸福をもたらすため、（伊藤公は）西の隣国（朝鮮）の帝王の子息の師となった。今、鳥が梅雨を前に、桑の根によって巢のゆるんだ所を修理するように、（伊藤公が）前もって危機に備えていたので、後日、葵丘で多くの国家の代表らが会合を持つ日が来よう。太平の時代を成した功績を、公は自ら見ることができず、それが英雄（伊藤）をして無念の涙をいや増しに多くする。）

「桑土」は桑の木の根で、兵乱が迫る前にあらかじめ備えることを意味する。『詩經』「豳風・鴟鴞」に「迨天之未陰雨，徹彼桑土，綢繆牖戶，今此下民，或敢侮予（天から梅雨の雨がまだ降らないときに、あの桑の木の根を取って集め、出入り口をしっかりと縛って結んでおけば、もう、そなたら下民が、もしやわざわざ我を侮ることがあるだろうか。）」とある。また、「葵丘」は、魯の僖公9年に齊の桓公が覇君として諸侯を集めて修好し、王室に忠誠を尽くすことを誓わせた場所である。伊藤博文が西洋列強の侵略に備え、東アジア各国が連帯して共に文明国へと発展できる礎を作り、それを土台に、いつか東アジア各国の首長たちが共に集って盟約を結ぶ日が来るだろう、と伊藤の功績を褒め称える。しかし、伊藤がその実現を見られなかったのは痛恨の極みであったであろうと悼んだ。

金允植は、1894年に督辦交渉通商事務・外務衙門大臣となり、その翌年に外部大臣へ昇進してから日本の各界の人士たちと広く交際した。このため、その文集には日本の人士と応酬した詩が大多数を占める。これらの作品の中には、上のような、いわゆる「親日」色の濃い詩も多く含まれており、金允植への評価は否定的な視線が支配的である。

しかし、金允植のこうした詩文唱和を否定的にのみ見ることはできないと思う。金允植は、各種の外交の場で、海外の人士と詩文を唱和し、伊藤博文が死亡した時には純宗に代わって致祭文（「徳壽宮伊藤博文致祭文」）を、英親王に代わって親祭文（「宮伊藤博文親祭文」）をそれぞれ著すといった国家の文衡を担った者としてその役割を遂行した。このような金允植の唱和詩は、その「親日」色は別にして、外交の場で作られた一種の外交詩として再評価する必要があると言えよう。

（金子祐樹* 訳）

* 東国大グローバル言語学部日本文学専攻助教授

附：図版『芝城山館納涼唱和集 輕妙唱和集合本』

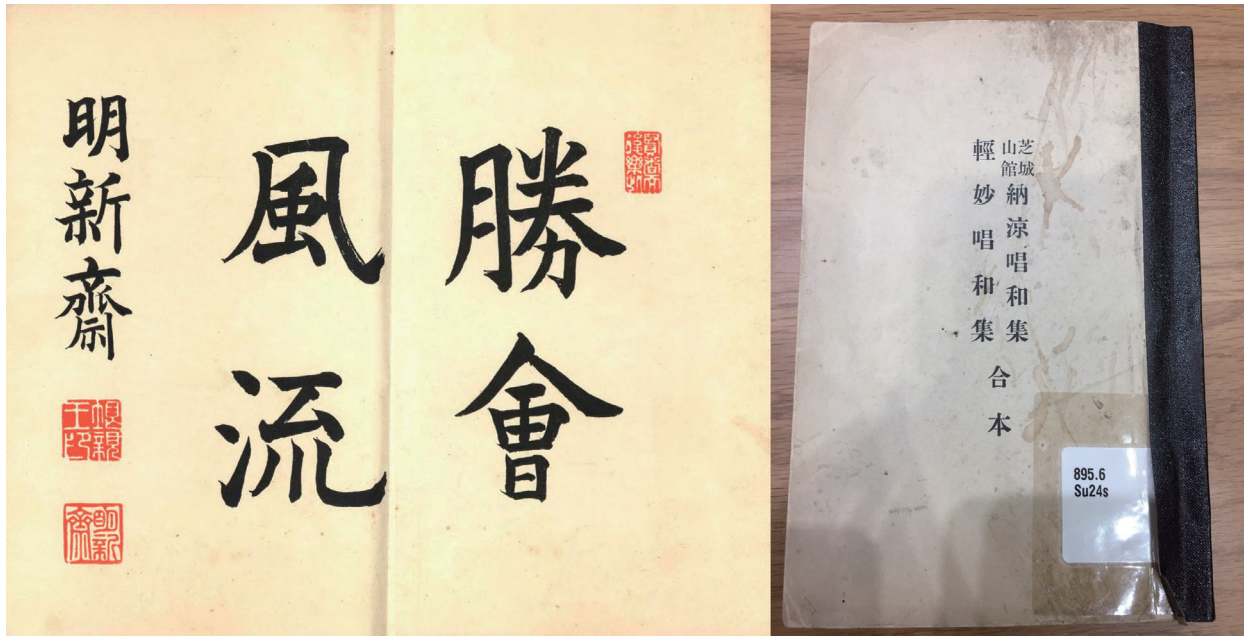


図1 『芝城山館納涼唱和集 輕妙唱和集合本』の表紙(右)と英親王の親題(左)

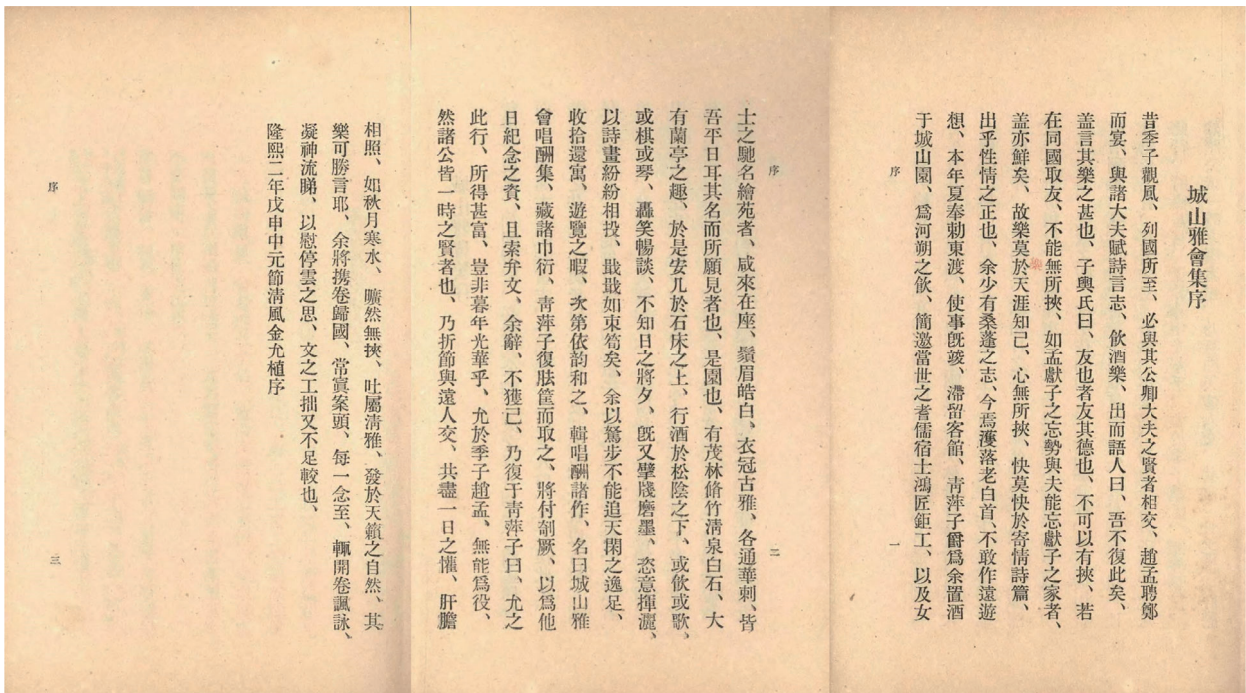


図2 金允植「城山雅會集序」

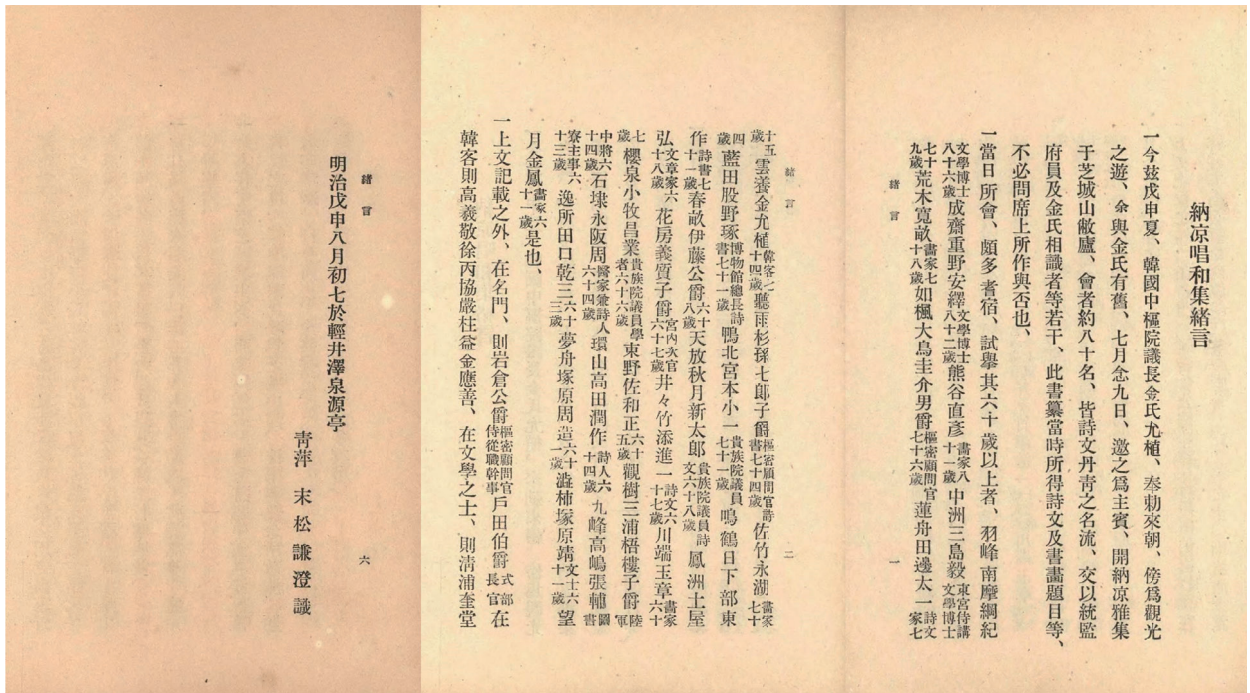


図3 末松謙澄「納涼唱和集緒言」

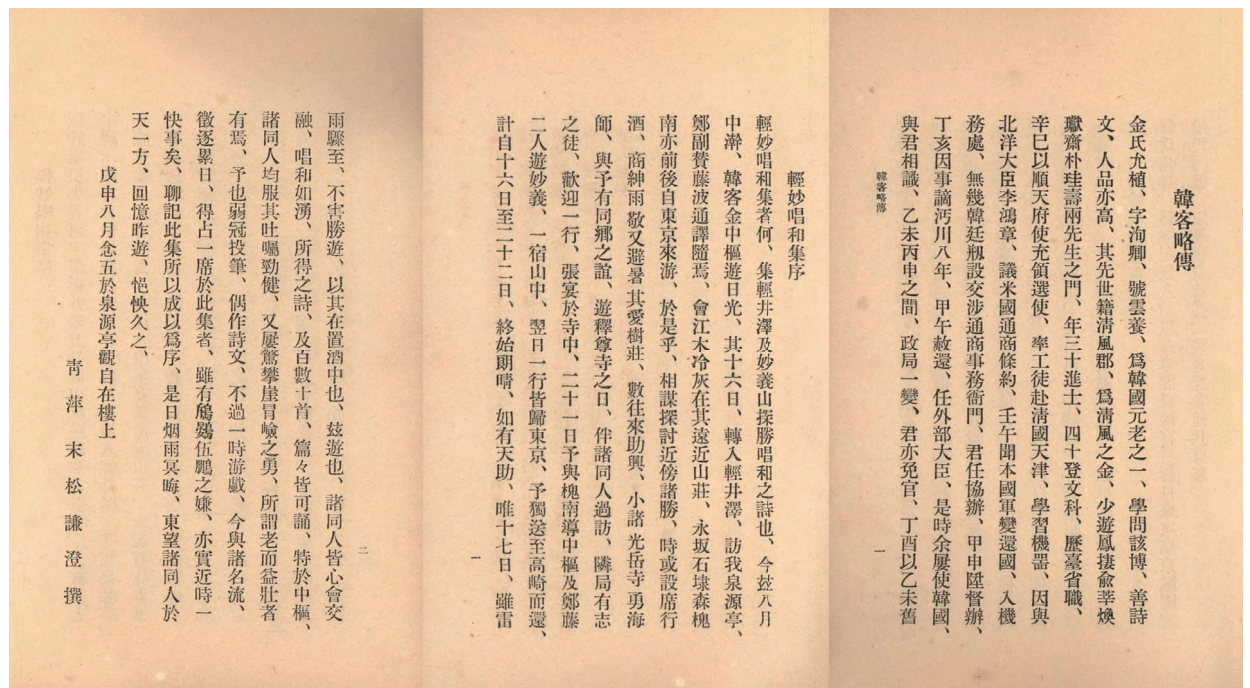


図4 末松謙澄「韓客略傳」(右)と末松謙澄「輕妙唱和集序」(左)

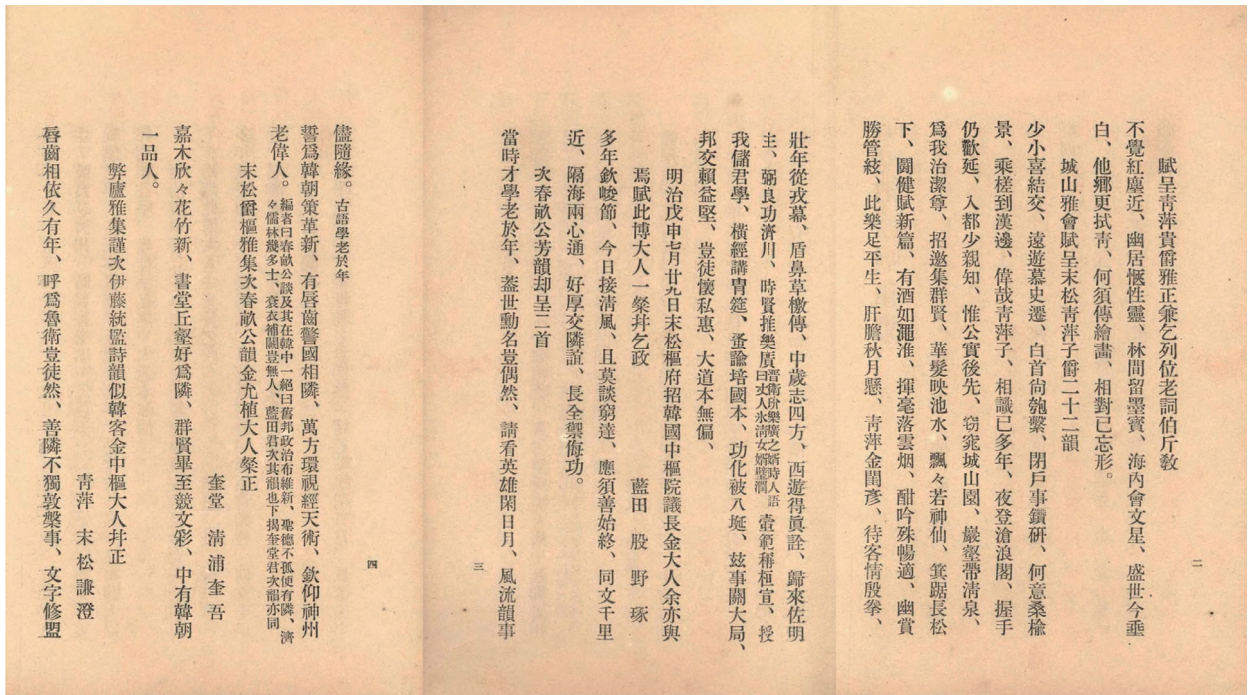


図5 『芝城山館納涼唱和集』の本文

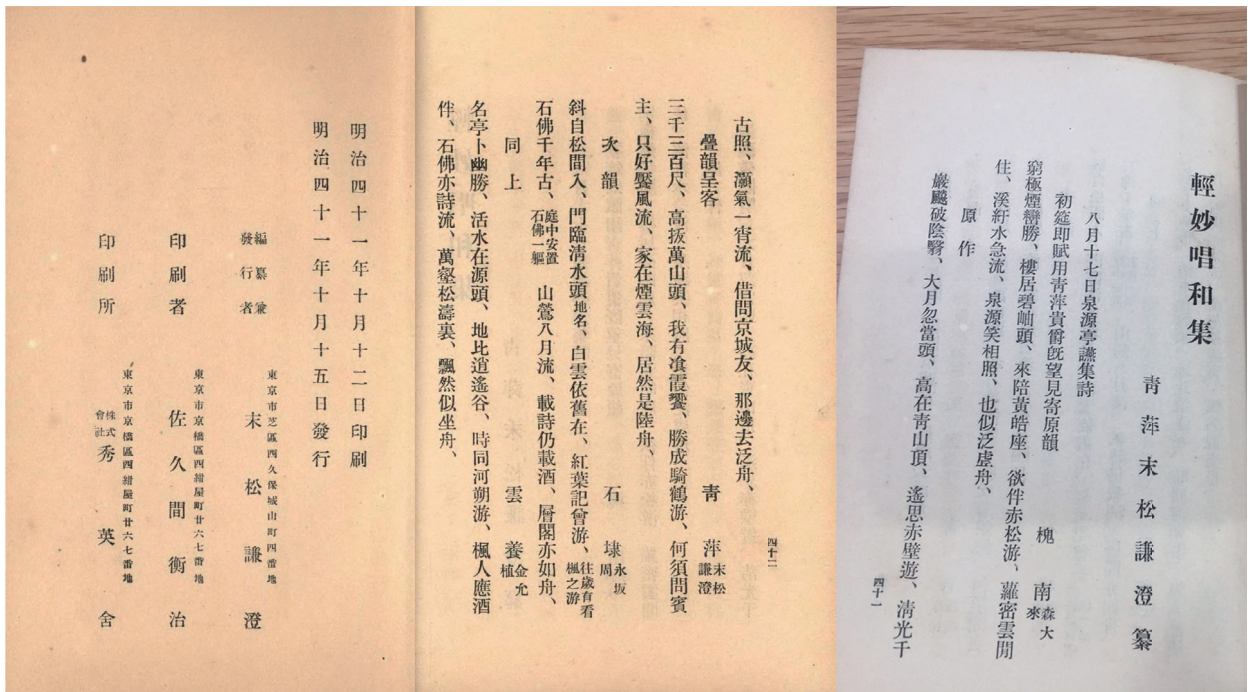


図6 『輕妙唱和集』の本文(右)と奥付(左)

参考文献

- 金允植（1960）『續陰晴史』國史編纂委員會。
——（2004）『雲養集』韓国文集叢刊 328, 韓国古典翻訳院。
末松謙澄（青萍）編（1908）『芝城山館納涼唱和集・輕妙唱和集合本』秀英舎。
——（1922）『青萍集』東京国文社。
小松緑編（1927）『伊藤公全集』全三卷, 伊藤公全集刊行会。
——編（1933）『春畝公詩文録』春畝公追頌会。
朴暎美（2006）『日帝強占 初期 漢學 知識人の 文明觀과 對日意識: 親日的 傾向을 中心으로 [日本統治期初期における 漢學知識人の文明觀と對日意識——親日的傾向を中心に]』檀国大学校博士学位論文。
金聖培（2009）『유교적 사유와 근대 국제정치의 상상력: 구한말 金允植의 유교적 근대 수용 [儒教的思惟と近代国際政治の想像力——旧韓末における金允植の儒教的近代受容]』創批。
許敬震·최해연 [츠헤=헤ヨン]（2011）「운양 金允植의 사행시를 통해 본 인식 변화 [雲陽·金允植の四行詩を通して見た認識の変化]」『영주어문 [瀛州語文]』21, 瀛州語文学会。
朴暎美（2012）「전통지식인의 친일 담론과 그 형성 과정 [伝統知識人の親日言説とその形成過程]」『民族文化』40, 韓国古典翻訳院。
金龍泰（2014）「金允植과 스에마쓰젠초의 詩文 수창에 대하여 [金允植と末松謙澄の詩文酬唱について]」『洌上古典研究』42, 洌上古典学会。
延旼姬（2019）『雲養 金允植의 散文 研究 [雲養·金允植の散文研究]』忠南大学校博士学位論文。
李知洋（n.d.）「운양집해제: 근대 전환기 雲養 金允植의 활동과 『雲養集』 [雲養集解題——近代轉換期における雲養·金允植の活動と『雲養集]]」(韓国古典総合データベースにて提供, <http://db.itkc.or.kr/> 2019年6月19日アクセス).